

実践的学習を取り入れた「乳児保育」についての試み 3

Consider incorporating practical learning about the "Baby Care" 3

— 学生が親子とのかかわりで学んだこと —

— The student learns by the communication with the parent and child —

永田恵実子

木村映子

三條美和

EMIKO NAGATA¹⁾

EIKO KIMURA²⁾

MIWA SANJIYO²⁾

はじめに

静岡英和大学では、2011年6月より概ね月1回のペースで『学生による子育て親子広場あちょぼ（以下『あちょぼ』と記す）』を開催してきた。校内を地域親子（主に3歳未満児と保護者）の子育て支援の場として解放したのである。毎回の『あちょぼ』の参加家族は、80家族以上。親子と学生、教員を合わせると、参加人数は250人を超える大規模な事業となった¹⁾。

この取り組みは、保育者を目指す学生たちにとっても子どもと接する経験を積むことになる非常に有意義な取り組みで、大勢の地域親子に関わることで、子どもの発達、保育内容の立案、保育技術の演習、親子の日々の生活の理解など、まさに、身をもって学べる保育実践の場となった。

2012年度に行った先行研究では、保育士養成課程の科目「保育の内容・方法に関する科目」として位置づけられる「乳児保育」を、保育実践の場『あちょぼ』で学ぶことができた。また、そこでは、①乳児保育の理念と役割の理解、②乳児保育の現状と課題の理解、③3歳未満児の発達と保育内容等の学び、④乳児保育の実践等での学生の成果について報告した¹⁾。

さらに、2013年度には、「乳児保育」に非常に重要な学生の取り組みの記録を元に、実践学習に於いての「学生の協働からの学び」の成果についても報告することができた²⁾。

2014年度の本研究では、「あちょぼ」での実践を通して、学生と来場してくれた家族とかかわりの詳細分析を行い、学生の気づきをまとめ報告する。

1. 実践的学習の流れ

(1) 実践学習の日程

学習の日程として、平成26年度前期『あちょぼ』の3か月分（5月26日、6月23日、7月17日）、毎回10:30分～12:00までの1時間半の間、学生たちに保育実践を運営させた。

1) 静岡英和学院大学

2) 社会福祉法人大原福祉会大原保育園

(2) 学生の役割分担

今回、「乳児保育Ⅰ」実践に取り組む学生は、35人（1年生3人、2年生27人3年生5人）。担当コーナーを5種類（図2参照）に分け、さらに遊具（滑り台、ボールプール）、玩具（車、ままごと・積み木・ブロック、乳児玩具）に担当パートをわかりやすく細分化し担当させた。

2. 実践からの学生の学び

(1) 方法

学生の担当場所を5か所（図1参照）に分け、各担当コーナー別に「乳児保育Ⅰ」における保育実践日3回（5月26日、6月23日、7月14日）での学生の保育実践の記録をもとに、学生と家族の関係に注目し、以下の3つの視点から分析することにした。

- 1）親子とのかかわりで気づいた点（①親子に関わる際の服装・髪形②挨拶の仕方③声かけ・コミュニケーション④大勢の参加に緊張した）
- 2）子どもとのかかわりで気づいた点（①あそびへの誘い方②安全の配慮③あそびの展開の仕方④あそびの環境づくり⑤子どもが泣きだした時の対応⑥子どもの年齢発達）
- 3）保護者とのかかわりで気づいた点（①保護者への説明の仕方②保護者からの要望の聴き方）である。ちなみに、1）親子とのかかわりで気づいた点の内容②挨拶の仕方③声かけ・コミュニケーションの項目を多くの学生が分けて記述していたことがあり、あえて別に捉えていることに注目し、考察することにした。

図1 学生の役割分担場所

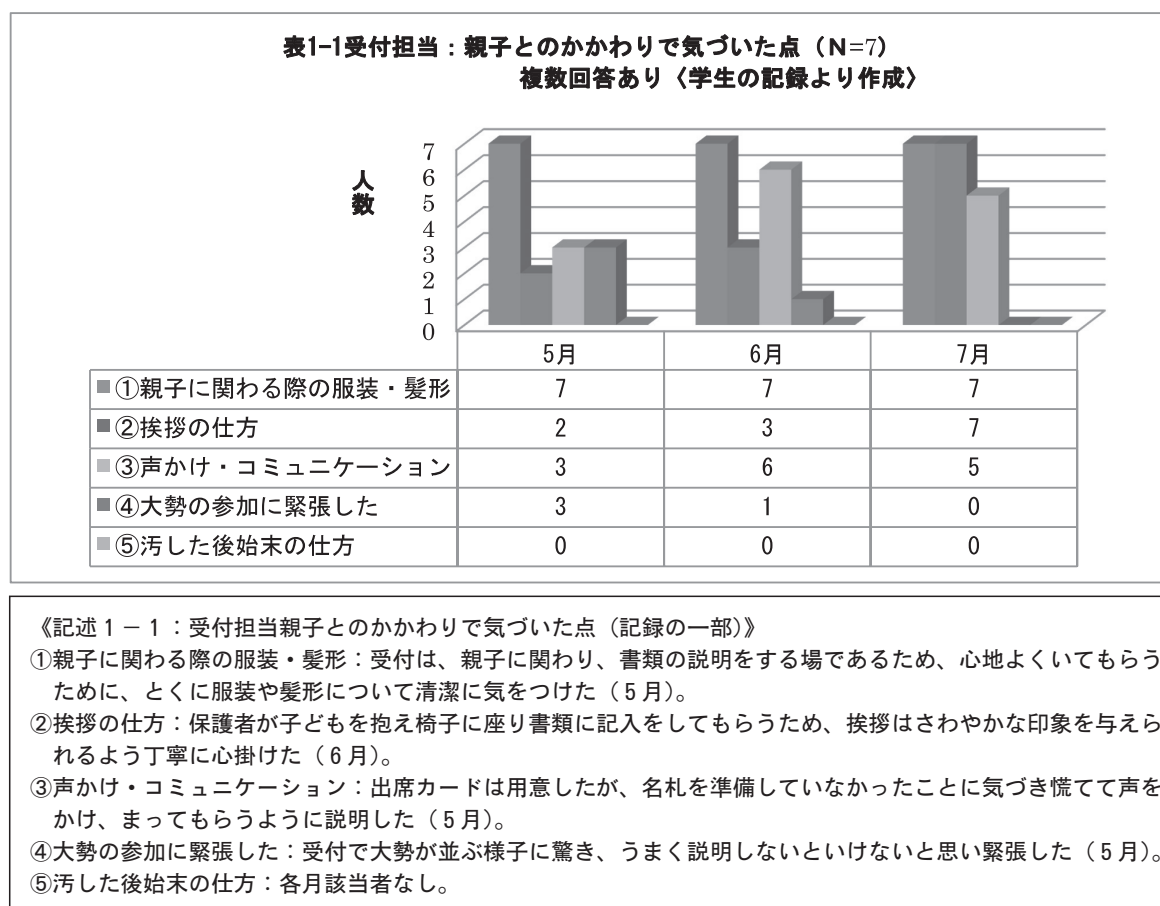


3 結果と考察

5月～7月の人数表と、具体的な事例として記述（学生の記録の一部：原文ママ）を示した。

(1) 受付

1) - 1 受付担当：親子とのかかわりで気づいた点



① 親子にかかわる際の服装・髪形

担当学生たちは、5月～7月の間、受付担当者7人全員が書類の説明をする際、親子に心地よくいてもらうために、とくに服装や髪形を清潔に保つよう気をつけていた。受付は、親子に最初に関わる場所であるため、学生同士で毎回の準備の際に確認しあっている姿がみられた。

② 挨拶の仕方

挨拶については初回5月の2人よりも6月には3人、7月には7人全員と、よりその大切さや難しさに気づいた。月を重ねるごとに人数が増えているのは、挨拶の前後の非言語的コミュニケーションの重要性についても理解できたようだ。

③ 声かけ・コミュニケーション

声かけ・コミュニケーションについては、初回5月には3人、6月には6人、7月には5人と変

化している。その中には、受付での保護者への書類の説明だけで手一杯であり、子どもにはどのような言葉をかけたらいいのかと迷った。また、挨拶ができて次の言葉かけにつながらないことを問題と思い、次の改善方法に迷う学生もいた。

学生たちは、挨拶と声かけ・コミュニケーションは同じコミュニケーションという大きなくくりではなく、この2つを別の行動と捉え、挨拶と声掛けの順番を考えて取り組んでいるようにみとれた。やり取りの内容では、名札の準備がうまくできなかったことをあげている。コミュニケーションにも事前の準備が大切であることを理解したようだ。

④ 大勢の参加に緊張した

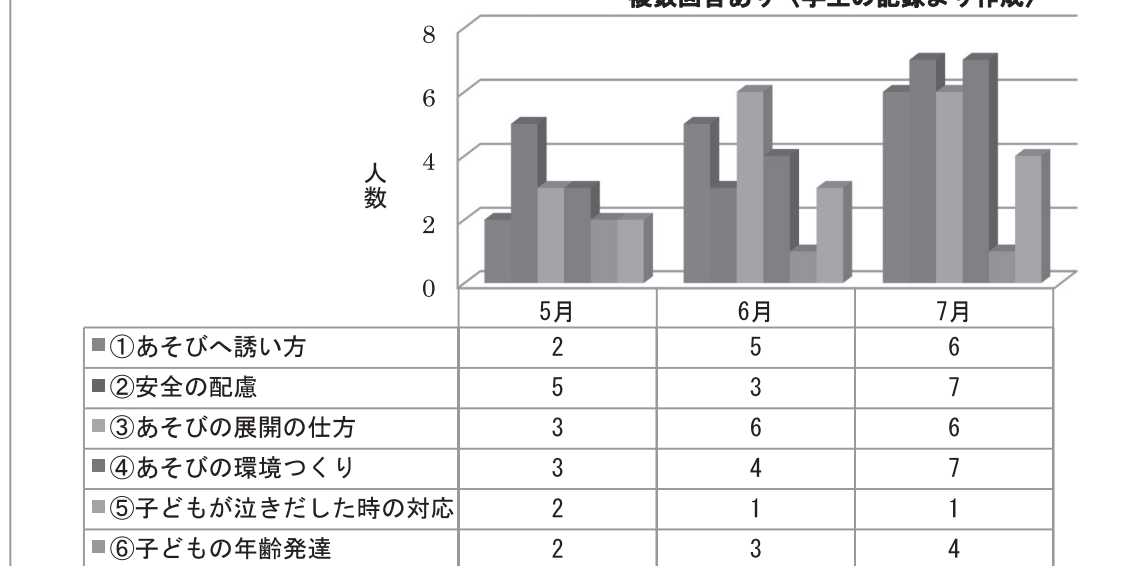
5月は3人、6月は1人、7月は0人と月を経ることに緊張する学生数が減っている。5月には、大勢の参加者が並び、学生自身が受付の手順に気づいていないことで緊張したが、徐々に受付の担当業務に慣れてきたことが読み取れている。

⑤ 汚した後始末の仕方

各月該当者がいなかった。

1) - 2 受付担当：子どもとのかかわりで気づいた点

表1-2 受付担当：子どもとの関わりで気づいた点（N=7）
複数回答あり（学生の記録より作成）



《記述1-2：受付担当子どもとのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①あそびへの誘い方：書類の確認、催しの流れをグループ内で確認し、あそびに誘える配慮をした（7月）。
- ②安全の配慮：受付に人が来ない時間になり、学生の劇を観ている親子のところに援助に行った（6月）。
- ③あそびの展開の仕方：他担当の玩具にいき全体の様子を見て動くことが必要なことを学んだ（6月）。
- ④あそびの環境づくり：言葉かけをして助け合うなどチームワークが大切な仕事だと気づいた（7月）。
- ⑤子どもが泣き出した時の対応：親が書類を記入している間に子どもが泣き出してしまいうこともあり、困った。
先輩から子どもに「名札の色は何がいいのかな」と優しく話しかけることを助言された（5月）。
- ⑥子どもの年齢発達：待つ時間に発達年齢にあった子どもの興味を引くものを準備する必要があった（6月）。

①あそびへの誘い方

受付でのあそびの誘い方については、5月は2人、6月は5人、7月は6人であった。学生たちは、受付で保護者が書類を記入している様子を見ている子どもに声をかけ、様々なあそびに誘うことができるようになってきている。催しの流れや他の遊具や玩具などでも子どもとかかわり、あそびに誘うことができるようになってきた。

② 安全の配慮

5月は5人、6月は3人、7月は7人とだんだんと人数が増えている。月を経るごとに受付の担当に慣れてきたため、時間を見つけ他の担当を手伝うことができるようになった。様々な担当場所において子どもの安全を注意しながらかわっていかねばならないことに気づいた。

③ あそびの展開の仕方

受付でのあそびの展開方法が考えられた学生は、5月には3人と少なかったが、6月と7月は6人に増加した。あそびの展開について考える余裕がみえてきたと読み取れる。6月には、受付担当であっても担当外の玩具などの場に積極的にサポートに出向き、全体の様子を見て動くことが必要なことを学んだ。

④ あそびの環境づくり

5月は3人、6月は4人、7月は7人であった。担当者は受付書類の準備で手一杯であったが、7月になると全員が、他担当の学生たちに言葉がけをして助け合った。担当をまたいでのチームワークが大切なのだと気づいた。

⑤ 子どもが泣きだした時の対応

5月は2人、6月は1人、7月は1人が該当した。初回の受付では、手順が慣れていないこともあり、保護者が記入している間に子どもが泣き出してしまったこともあった。担当場所の先輩から、表情や声を優しくすることを助言された。先輩との関係ができることで、子どもへの対応の仕方を学ぶことができた。

⑥ 子どもの年齢発達

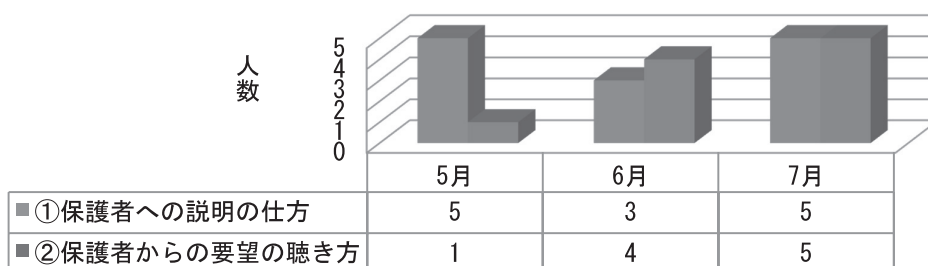
5月は2人、6月は3人、7月は4人が該当し、泣き出す前の時の対応ができるようになってきている。6月には、書類に記入する母親を待つ子どもの傍に、音に出る玩具や可愛い人形など、子どもの興味をひく発達年齢にあった玩具を事前に準備しておく必要性に気づいた。初回担当では目の前の書類の説明で手一杯であったが2回目には余裕ができた。

1) - 3 受付担当：保護者とのかかわりで気づいた点

① 保護者への説明の仕方

5月は5人、6月は3人、7月は5人と、月によって人数のばらつきがあった。初回では、保護者がすばやく受付書類を記入できるように、学生が子どもを抱っこしたが、逆に子どもだけに気を取られ、親への説明がうまくできなかった。手の空いた学生に支援を求めるべきだったと感じている。6月には前回の気づきの改善をしたが、7月にはまた、双子を連れた保護者や様々な親への状

表1-3 受付担当：保護者とのかかわりで気づいた点（N＝7）複数回答あり
〈学生の記録より作成〉



《記述1－3：受付担当保護者とのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①保護者への説明の仕方：保護者が記入している時に子どもを抱っこして書きやすくしたが、子どもだけに気を取られ、親への説明がうまくできなかった。周りの学生に支援を求めればよかった（5月）。
 ②保護者からの要望の聴き方：アンケートは、子どもを連れていて書きにくいため、学生が子どもをみてあげて親に記入する時間をつくってもらえると書きやすいのではと思った（5月）。

況に応じた説明の仕方の難しさに気づきがあった。

② 保護者からの要望の聴き方

5月は1人、6月は4人、7月は5人であった。帰り支度のあわただしさの中、保護者の両手が荷物や子どもでふさがり、アンケートを書きづらいという保護者の意見があった。学生が子どもを見守ることで、保護者にアンケートを記入する時間をつくってもらうことができると気がついた学生が増えている。

(2) 制作

2)－1 製作担当：親子とのかかわりで気づいた点

表2-1 制作担当：親子とのかかわりで気づいた点（N＝7）複数回答あり
〈学生の記録より作成〉

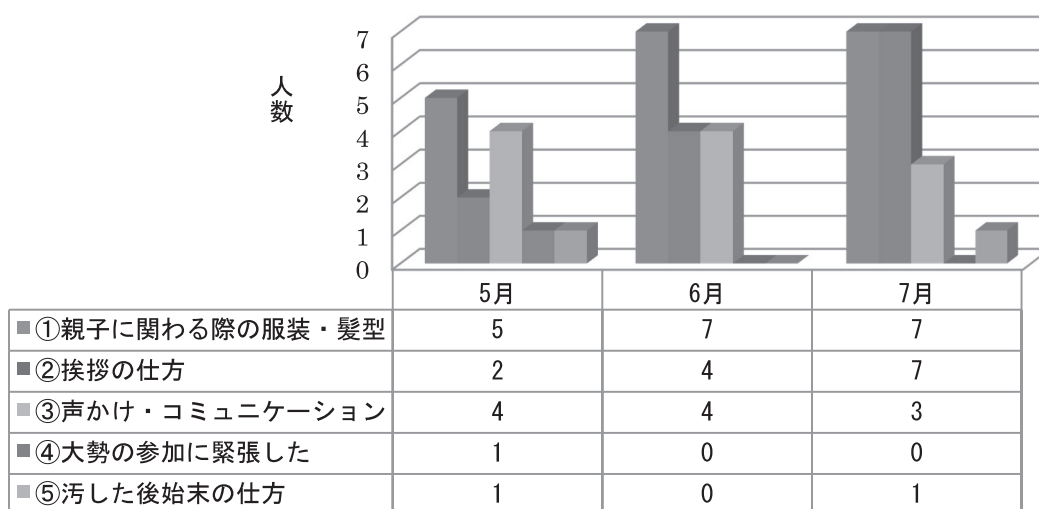




写真1 受付で親子とかわる様子



写真2 制作で子どもとかわる様子

《記述2-1：制作担当 親子とのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①親子に関わる際の服装・髪形：スカートではなく、動きやすい服装（長ズボンなど）にする（6月）。
- ②挨拶の仕方：笑顔を中心掛け、子どもが発する言葉に答え、その子なりの表情を受け止めた（7月）。
- ③声かけ・コミュニケーション：子どもが進んで制作できるような環境や場の雰囲気づくり。子どものつくったものを「じょうずだね」と褒めるなど、楽しめるようにした（7月）。
- ④大勢の参加に緊張した：多くの人に驚いたが、保護者にも手助け求めることに遠慮や躊躇することなく、むしろいっしょに作っていくのだと感じた（6月）。
- ⑤汚した後始末の仕方：子どもがのりの使い方やマジック、クレヨンの使い方が分からないまま使ったため、制作スペースが汚れた後に来た子どもたちが使いにくかった。その都度使い方を知らせるべきであった（7月）。

① 親子に関わる際の服装・髪形

5月は5人、6月は7人、7月は7人であった。初回の事前打ち合わせで、スカートではなく動きやすい長ズボンなどを履くことをグループで話し合った。7月には第1印象として、服装・髪形の大切さを全員が理解した。

② 挨拶の仕方

5月は2人、6月は4人、7月は7人と月を追うごとに増えている。7月には、挨拶だけでなく、子どもには必ず笑顔で接し、個々の子どもの表情を受け止められるようになっている。

③ 声かけ・コミュニケーション

5月は4人、6月は4人、7月は3人であった。月を経るごとに人数が減っている。7月には、子どもが進んで制作できるような環境や場の雰囲気づくりを心掛けた。また、コミュニケーションについては、子どもの気持ちを考えて子どもを褒め、子どもが楽しめる雰囲気づくりができた。5～6月にはできなかったことが自然にできるようになっている。

④ 大勢の参加に緊張した

5月は1人、6月は0人、7月は0人。初回には学生たちが、保護者にも手助けを求めることに遠慮や躊躇していたが、6月からは親子と一緒に作っていくことができるようになった。このことから、回数を重ねるごとに緊張がなくなったと考えられる。

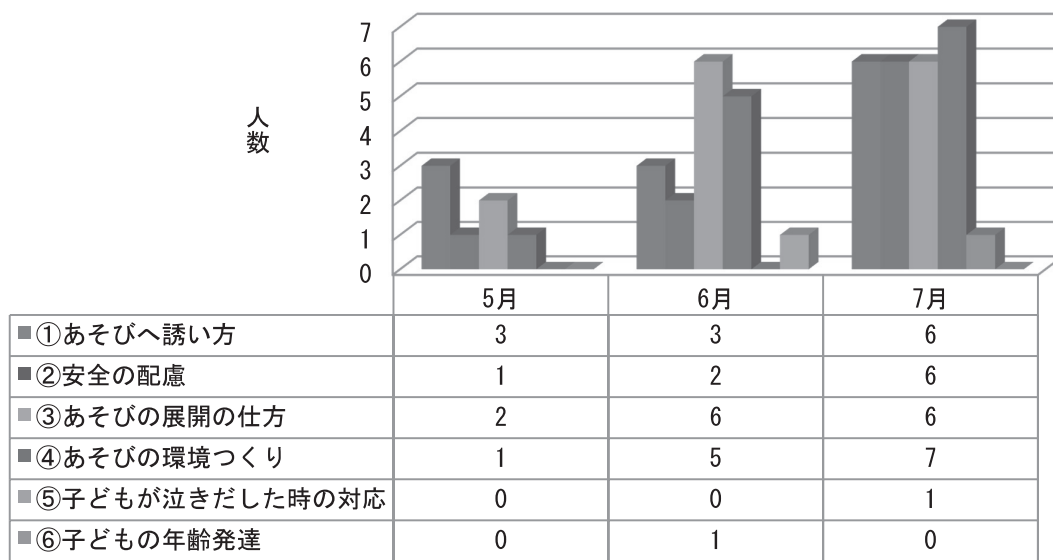
⑤ 汚した後始末の仕方

5月は1人、6月は0人、7月は1人であった。制作では、子どもがのりやマジック、クレヨンを使用する。しかし、使い方が分からない場合もあり、制作スペースが散乱してしまうことがある。

7月の学生の気づきには、後に来た子どもたちが使いにくくなってしまうため、その都度使い方を知らせるべきであったとの報告があった。

2) - 2 制作担当 子どもとのかかわりで気づいた点

**表2-2 制作担当：子どもとのかかわりで気づいた点（N=7）複数回答あり
〈学生の記録より作成〉**



《記述2-2制作担当 子どもとのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①あそびへの誘い方：制作の目的は、①親子で楽しんで作ってもらうこと②作ったものを家に持ち帰り、お家でも同じように子どもと作って遊んでもらうことを説明しあそびに誘った（7月）。
- ②安全の配慮：はさみやのりなどを使うため、使用させる際は子どもに危険のないように注意した（7月）。
- ③あそびの展開の仕方：カードのパーツを子どもの目の前に見せ、「どれがいい？」と声をかけ、子どもが選択できるように関わり、子どもが主体的にあそべるようにした（6月）。
- ④あそびの環境づくり：こうしなければならないという、型にはまったあそびを子どもに求めるのではなく、子どもの好きな遊び方や好きな色を使って制作する楽しさを味わわせることがわかった（6月）。
- ⑤子どもが泣き出した時の対応：子ども2人を連れている親子が参加していた。その際は、お母さんの目が制作に夢中になっているお兄ちゃんの方に集中してしまうため、私は、赤ちゃんを見守りあやした（7月）。
- ⑥子どもの年齢発達：子どもがしたいあそびをさせることは大切だが、何をしてもよいということではなく、他の子どもとの発達にあった支援が大切だと気づいた（6月）。

① あそびへの誘い方

5月は3人、6月は3人、7月は6人であった。7月になると、他の遊具や玩具であそんでいる子どもに声をかけ、制作物を見せることで、制作スペースにあそびに来てもらえることに気がついた。本来の制作の目的は、①親子で楽しんで作ってもらうこと、②作ったものを家に持ち帰り、家庭でも同じようにあそんでもらうことだと気がついた。

② 安全の配慮

5月は1人、6月は2人、7月は6人となり、月を経て気づく学生が増加している。7月になると、制作コーナーの全体が把握でき、はさみやのりなどを使用させる際は子どもに危険のないよう

に注意できるようになっている。

③ あそびの展開の仕方

5月は2人、6月は6人、7月は6人であった。6月になると、制作用のカードや細かなパーツをわかりやすく子どもの目の前に置き、子どもに誘いかけた。また、パーツなどは子どもに自分で選択させ、子どもが主体的にあそべるように工夫できるようになった。

④ あそびの環境づくり

5月は1人、6月は5人、7月は7人。6月になると、制作物をつくる際、型にはまったあそびを押し付けてはいけないことに気づいた。子どもの好きな遊び方や好きな色を使って制作する楽しさを味わわせることの重要性を理解している。7月には、あそびを援助する環境づくり、制作物の準備物や援助者としての環境についても考えられるようになってきた。

⑤ 子どもが泣き出した時の対応

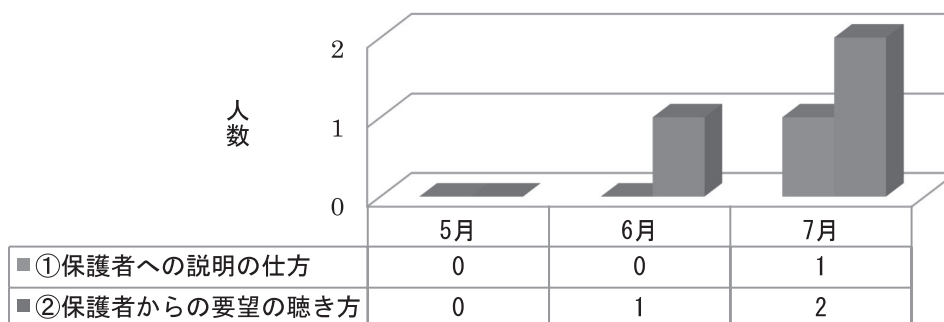
5月は0人、6月は0人、7月は1人であった。7月には、子ども2人の兄弟を連れてくる家族の参加で気づくことがあった。お母さんの目が制作に夢中になっているお兄ちゃんの方に全面的に集中してしまったため、そばにいた下の子どもが泣きだしてしまった。赤ちゃんを見守りあやすことが必要になり、兄弟で参加する家族の場合はどちらか一人の子どもをあやしたり、見守ったりする必要があった。

⑥ 子どもの年齢発達

5月は0人、6月は1人、7月は0人。6月になり、制作コーナーでは、子どもがしたいあそびをさせることは大切だということを理解できたが、ただ何をしてよいということではなく、子どもの発達にあった援助が必要だと気づいたようだ。

2) - 3: 制作担当 保護者とのかわり方で気づいた点

表2-3 制作担当：保護者とのかわり方で気づいた点（N=7）
複数回答あり〈学生の記録より作成〉



《記述 2 - 3：制作担当 保護者とのかわり方で気づいた点（記録の一部）》

- ①保護者への説明の仕方：制作の内容を知ってもらうために、「こういうものを作っていますよ」と子どもとあそぶ親のところへ行って呼び込みをした。そのうちに親子が制作に興味を持ってくれた（7月）。
②保護者からの要望の聴き方：制作の説明を求められたがどう応えてよいかわからず慌てた。今回は事前に手順を伝えることができるほど内容を熟知することが大切だと分かった（6月）。

① 保護者への説明の仕方

5月は0人、6月は0人、7月は1人。7月になると、親に制作の内容を知ってもらうために、「こういうものを作っていますよ」と子どもとあそぶ親のところへ行行って呼び込み説明をした。そうしていると、親子が制作に興味を持ってくれた。親子がくるのをただ待つのではなく、制作物をみせて歩き、内容の説明をしていくことが必要であることに気づいた。

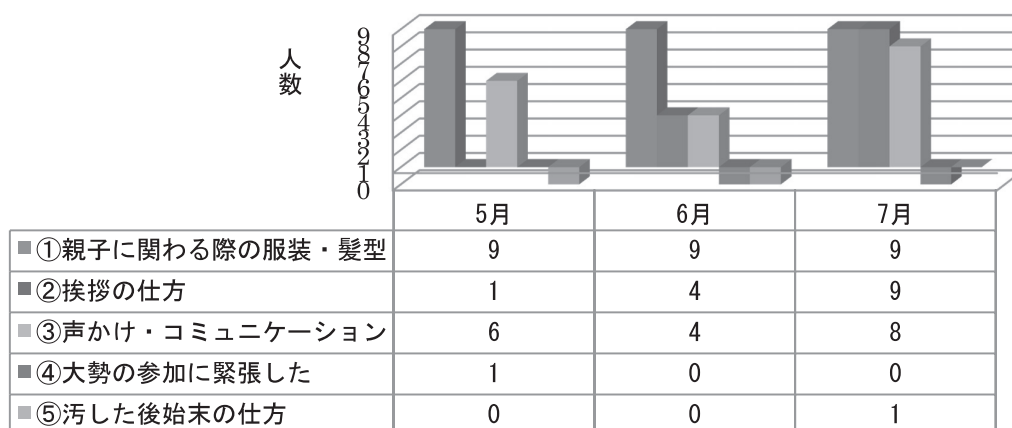
② 保護者からの要望の聴き方

5月は0人、6月は1人、7月は2人。月を経るごとに人数が増えている。6月には制作の説明を求められたがどう応えてよいかわからず慌ててしまった。そして、事前に手順を伝えることができるほど内容を熟知する必要があることを理解した。7月にはグループ全体で説明の仕方を確認しあっていた。

(3) 遊具・玩具

3) - 1 遊具・玩具担当 親子とのかかわりで気づいた点

表3-1 遊具・玩具担当：親子のかかわりで気づいた点（N=12）
複数回答あり〈学生の記録より作成〉



《記述3-1：遊具・玩具担当 親子とのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①親子に関わる際の服装・髪形：長い髪は縛る・動きやすい服装・丁寧な言葉遣い・衛生面に気づかうことについてグループで話し合った（5月）。
- ②挨拶の仕方：挨拶の前に目線にあわせることの大切さを知った。目を合わせることで、目線の先のもの、どこに興味があるのが分かった（7月）。
- ③声かけ・コミュニケーション：積み木を投げてしまう子どもがいたが、注意の仕方に迷った（5月）。
- ④大勢の参加に緊張した：同時に来た複数の親子に緊張し、声をかけることができなかった（5月）。
- ⑤汚した後始末の仕方：乳児があそんでいる時に突然吐いた。はじめてでどう対応していいかわからなかった（7月）。

① 親子に関わる際の服装・髪形

5月は9人、6月は9人、7月は9人であった。すべての遊具や玩具の担当者が服装や髪形に注意していることがわかった。5月の段階で、長い髪は縛ること、動きやすい服を着用すること、親

子には丁寧な言葉遣いをすること、遊具、玩具の消毒をして衛生面に気づかうことについてグループ内で確認していた。

② 挨拶の仕方

5月は1人、6月は4人、7月は9人と毎月気づく人数が増えている。7月には挨拶をすることからかかわりが始まることや、挨拶の前に目線にあわせることの大切さを理解している。丁寧に子どもと目線を合わせることで、子どもの興味の先を知り、かかわりの糸口をみつけれられることがわかった。

③ 声かけ・コミュニケーション

5月は6人、6月は4人、7月は8人。月が増すごとに人数が増えている。5月には、子どもへの注意の仕方についての記述があった。積み木を投げてしまう子どもがおり、学生たちは子どもの行動の制止の言葉かけに迷った。

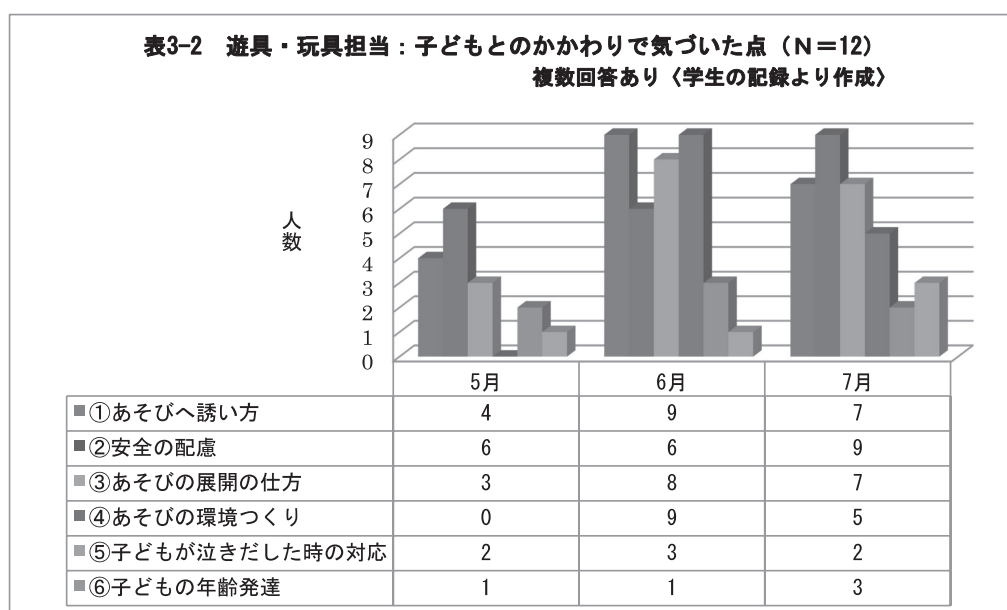
④ 大勢の参加に緊張した

5月は1人、6月は0人、7月は0人。月を経るごとに人数が減っている。5月には、大勢の親子が滑り台やボールプールにやってきたことに緊張してしまい、思うように声をかけることができなかったようだ。

⑤ 汚した後始末の仕方

5月0人、6月は0人、7月は1人。7月には、乳児があそんでいる時に突然吐いてしまった。はじめてでどう対応していいかわからなかったため焦った。お母さんに飲んできたミルクを吐いたことを聴いて、病気などで吐いたのではないことがわかり安心した。看護師さんに相談し、ビニール手袋や雑巾、アルコール消毒などが必要なことや後始末の仕方を聴いた。落ち着いて周囲と連携した対応が必要であったと気づいた。

3) - 2 遊具・玩具担当 子どもとのかかわりで気づいた点



《記述3-2：遊具・玩具担当 子どもとのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①あそびへの誘い方：保護者に「うちの子は〇〇であそぶの」と教えてもらい、好きなあそびを教えてもらい好きなあそびに誘った（6月）。
- ②安全の配慮：子どもの足元に危険なものはないか、壊れた玩具がないか、剥がれている壁面はないか、十分確認し保育環境の安全に注意した（6月）。
- ③あそびの展開の仕方：乳児とのやり取りがわからないため、関わり続けるにはどうすべきなのか分からず、周りの学生の様子を見て学んだ（5月）。
- ④あそびの環境づくり：環境を把握するため、1人の子どもを見たり全体を見渡したりしたが、臨機応変な対応の大切さを感じた（6月）。
- ⑤子どもが泣き出した時の対応：子どもが泣き出した際対応に困った。子どもの泣いている理由がわからないため、学生だけでは対応できず、保護者が子どもから目を離せない（6月）。
- ⑥子どもの年齢発達：乳児は、月齢により遊び方や興味をもつもの異なるため、さまざまな玩具をそろえることと、保護者に子どもの普段の様子を尋ねた上で、関わる必要があると感じた（7月）。

① あそびへの誘い方

5月は4人、6月は9人、7月は7人と月により人数の変動がある。5月には子どもとあそぶ際にどんなあそびに誘ったらよいか迷った。6月になると保護者との関係ができ、「うちの子はままごとであそぶの」と教えてもらい、子どもの好きなままごとあそびに誘うことができている。

② 安全の配慮

5月は6人、6月は6人、7月は9人であった。6月になると、子どもの足元に危険なものはないか、壊れた玩具がないか、剥がれている壁面はないかという点を十分確認し、保育環境の安全に注意してあそばせることができるようになった。7月には9人が会全体の様子を把握し、安全に注意していることがわかった。

③ あそびの展開の仕方

5月は3人、6月は8人、7月は7人。5月の会では、あそびの展開をしたくても乳児とのやり取りの仕方がわからないため、あそびを続けるために取るべき行動が分からなかった。そのため、周りの学生の様子を見て学んだ。6月には、先輩のあそびの展開の仕方を真似ながら子どもとかわった。

④ あそびの環境づくり

5月は0人、6月は9人、7月は5人。人数に変動があった。6月にはあそびの環境づくりに9人が気をつけている。1人の子どもを見るだけでなく、全体を見渡しながら、環境整備の大切さに気づいた学生もいた。子どものあそびにはその時々の変化に対応する臨機応変さが必要だと理解した。

⑤ 子どもが泣き出した時の対応

5月は2人、6月は3人、7月は2人であった。子どもが泣き出した際、泣いている理由が理解できないため、対応の仕方に困った。子どもが泣きだした際は、学生だけでは対応できないことから、保護者が子どもから目を離せないことに気がついた。

⑥ 子どもの年齢発達

5月は1人、6月は1人、7月は3人であった。7月になると、子どもの年齢発達として、とく

に乳児は、月齢が少し違うだけでも遊び方や興味をもつ玩具が異なるため、子どもが好きな玩具を選べるように、事前に様々な玩具をそろえておくことの必要性に気づいた。また、保護者に子どもの普段の様子を尋ねた上で、子どもとかがわるが必要だと理解した。



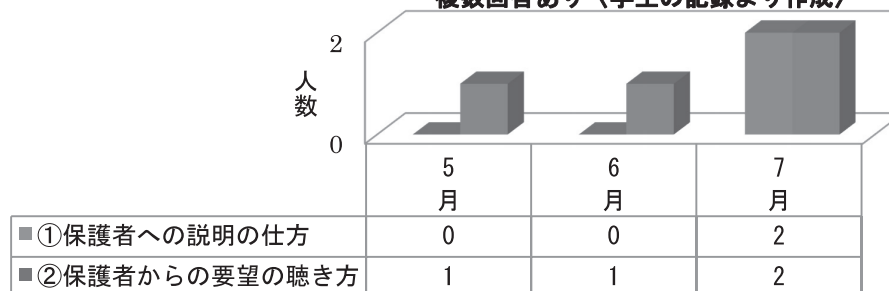
写真3 ボールプールで子どもとかがわる様子



写真4 ブロックで子どもとかがわる様子

3) - 3 遊具・玩具担当 保護者とのかかわりで気づいた点

表3-3 遊具・玩具担当：保護者とのかかわりで気づいた点（N=12）
複数回答あり〈学生の記録より作成〉



《記述3-3：遊具・玩具担当 保護者とのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①保護者への説明の仕方：7月にも初めて参加している人たちもいるため、毎回丁寧に同じ質問でもていねいに受け答えする必要があった（7月）。
- ②保護者からの要望の聴き方：母親に話かけたが、話が途中で途切れ焦った。こちらから質問することで、母親側から話を振ってくれた（7月）。



写真5 駐車場の掃除の様子



写真6 入口で親子の手に消毒する様子

① 保護者への説明の仕方

5月は0人、6月は0人、7月は2人であった。7月にでも、初めて参加している人たちもいるため、毎回同じ質問をされてもていねいに受け答えする必要があることに気づいている。

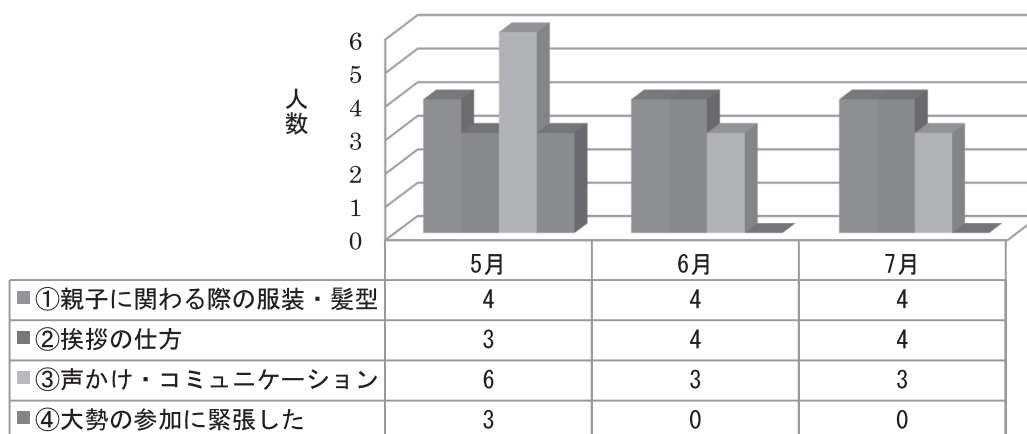
② 保護者からの要望の聴き方

5月は1人、6月は1人、7月は2人。要望に気づく人数が少ないが、7月でも親に話かけても話が途切れて焦ってしまったが、学生から質問することで母親が要望を話してくれることがわかった。

(4) 駐車場

4) - 1 : 駐車場担当 親子とのかかわりで気づいた点

表4-1 駐車場担当：親子とのかかわりで気づいた点(N=6)
複数回答あり〈学生の記録より作成〉



《記述4-1：駐車場担当 親子とのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①親子に関わる際の服装・髪形：服装（エプロン、名札、スニーカー）などについて話しあった（5月）。
- ②挨拶の仕方：案内に慣れず、棒立ちになった。また、緊張して親子に挨拶ができなかった（5月）。
- ③声かけ・コミュニケーション：駐車場にきた人にはまずていねいに挨拶。その後指示に従ってもらう（6月）。
- ④大勢の参加に緊張した：大勢参加してくれたため、駐車スペースを素早く保護者に指示しないと後続車がその場で立ち往生するということがあり緊張した（5月）。

① 親子に関わる際の服装・髪形

5月は4人、6月は4人、7月は4人であった。5月には親子に関わる際の髪形や服装、とくに、エプロン、名札、スニーカーなどについて話し合っている。駐車場は、親子と最初にかかわる場所であるため、第一印象に気をつけている。

② 挨拶の仕方

5月は3人、6月は4人、7月は4人であった。5月には、学生自身が駐車場の場所の理解が不足していたことで、車の誘導案内に慣れず棒立ちになってしまった。また、緊張して親子に挨拶ができなかったことも気になった。7月には戸外の暑さに耐えながら親子の安全を考えて挨拶するこ

とが大変だった。

③ 声かけ・コミュニケーション

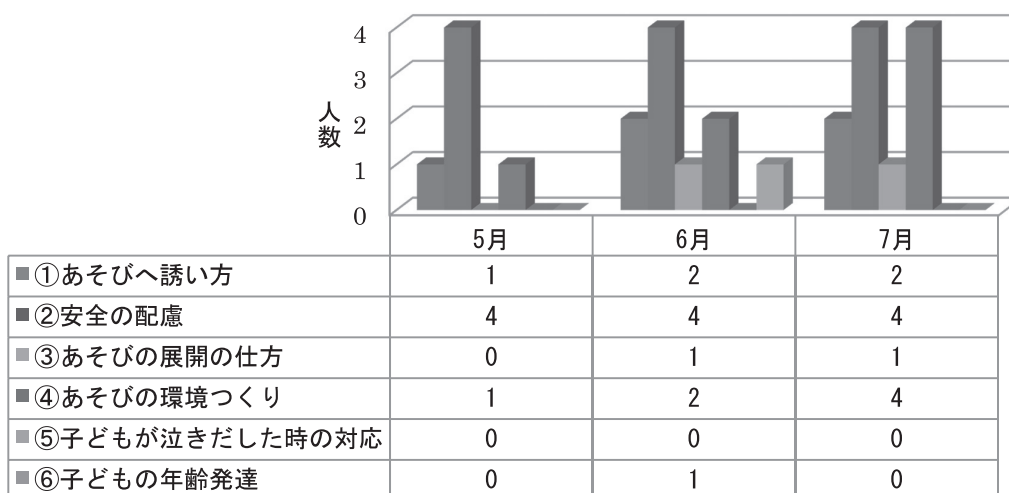
5月は6人、6月は3人、7月は3人であった。5月には気づけなかったが、6月には駐車場にきた親子にはまずていねいに挨拶することを意識した。その後声かけ・コミュニケーションに注意しながら指示に従ってもらった。

④ 大勢の参加に緊張した

5月は3人、6月は0人、7月は0人であった。5月には思いがけず大勢参加してくれたため、駐車スペースを素早く保護者に指示しないと、後続車がその場で立ち往生するという不安があり、非常に緊張した。

4) - 2 : 駐車場担当 子どもとのかかわりで気づいた点

表4-2 駐車場担当：子どもとのかかわりで気づいた点（N=6）複数回答あり
〈学生の記録より作成〉



《記述 4 - 2 : 駐車場担当 子どもとのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①あそびへの誘い方：駐車場は外で親子に会うため、室内のあそびと繋がりにくい。当日のあそびのスケジュールを知っていないとあそびへ誘いにくいことがわかった（6月）
- ②安全の配慮：駐車場が分散して何カ所もあるため、スペースが無くなったらすぐ次を確保しなければならない。異なる場に順番に誘導していくことが必要なため、グループで何度も話しあった（5月）。
- ③あそびの展開の仕方：親子が来る前に、手が空いていた学生と協力して駐車場の落ち葉を掃除し、車あそびの準備をしてから、親子を迎え入れる準備をした。あそびの流れを考えての準備をした（7月）。
- ④あそびの環境づくり：駐車場で声をかけるが、うまく聴き取ってもらえなかった。楽しい雰囲気を出しジェスチャーだけでも読み取ってもらう配慮が全体の配慮が必要だと思った（7月）。
- ⑤子どもが泣き出した時の対応：各月該当者なし
- ⑥子どもの年齢発達：駐車場を歩行してくる子どもの中には、まだ歩き始めの子どももあったため、足場の悪いことや、後続車に待ってもらうなどに注意し見守った（6月）。

① あそびへの誘い方

5月は1人、6月は2人、7月は2人。5月には駐車場の担当業務だけに意識を集中していたが、6月には、戸外だけでなく、室内のあそびとのつながりの重要性を理解した。会全体のスケジュール

ルを熟知していないと室内あそびへ誘いにくいことがわかった。

② 安全の配慮

5月は4人、6月は4人、7月は4人。駐車場が分散しているため、安全の配慮の観点から、同じ担当の学生と連絡を取り合い、駐車場全体を把握するよう努めた。駐車スペースが無くなったらすぐ次を案内し、円滑に車の誘導を行った。

③ あそびの展開の仕方

5月は0人、6月は1人、7月は1人。6月になると大学の校内全体が見て取れるようになった。7月になると、学生たちは、室内のあそびの準備を終えてから、親子が来る前の駐車場の落ち葉を掃除した。

④ あそびの環境づくり

5月は1人、6月は2人、7月は4人であった。7月に車を運転している親子に声をかけたが、戸外の車あそびコーナーを見ていて、声かけをうまく聴き取ってもらえなかった。誘導にも楽しい雰囲気を出し、声だけでなくジェスチャーなどで指示を読み取ってもらう配慮が必要だと感じた。

⑤ 子どもが泣き出した時の対応

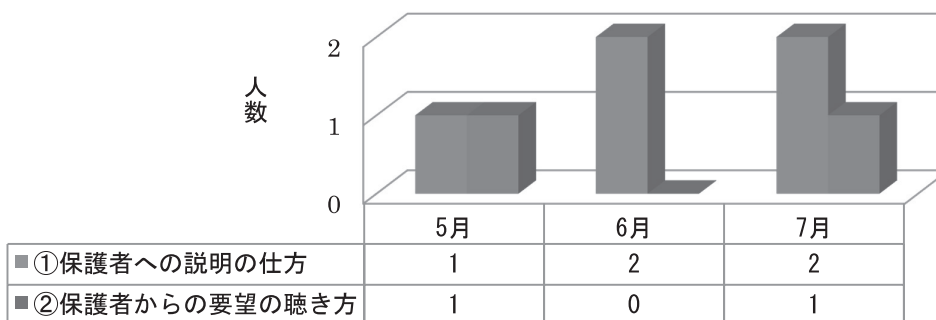
5月は0人、6月は0人、7月は0人。子どもが泣きだすケースが見られなかった。

⑥ 子どもの年齢発達

5月は0人、6月は1人、7月は0人。6月参加者で駐車場を歩行している子どもの中には、まだ歩き始めの子どもも見られた。足場の悪いところがあり、よちよち歩きの親子が安全に通り過ぎるのを後続車に待ってもらうよう指示した。

4) - 3 : 駐車担当 保護者とのかかわりで気づいた点

表4-3 駐車場担当：保護者とのかかわりで気づいたこと
(N=6) 複数回答あり〈学生の記録より作成〉



《記述 4 - 3 : 駐車担当 保護者とのかかわりで気づいた点 (記録の一部)》

- ①保護者への説明の仕方：駐車場への誘導は、言葉だけでは分かりにくいことが理解できたため、遠目でもわかる矢印のプラカードをつくり、駐車する場所の理解がしやすいようにした（5月）。
- ②保護者からの要望の聴き方：駐車場は一時に混むため、担当外の学生が手伝いにこられるように、どの学生でも駐車場が担当できるようにしておくことが大切だと思った（7月）。

① 保護者への説明の仕方

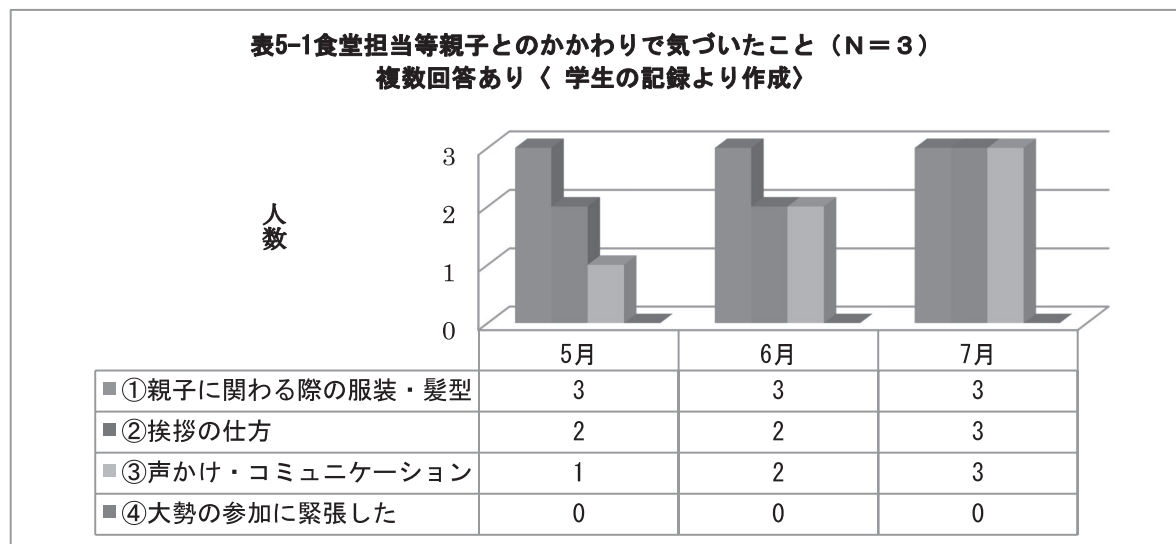
5月は1人、6月は2人、7月は2人であった。親子が車の中にいるため、言葉だけの説明では分かりにくいことを事前に先輩から聴いていた。遠目でも案内がすぐわかる矢印のプラカードをつくり、保護者に駐車する場所を理解してもらいやすいよう工夫した。

② 保護者からの要望の聴き方

5月は1人、6月は0人、7月は1人であった。5月には、駐車場で手荷物や子どもを抱えて手一杯で車を降りる母親を見かけた。駐車場担当の仕事は、駐車場に車を入れる指示をすることだけでなく、親子を室内まで安全に誘導することであると気づいた。7月には、駐車場は一時的に混むため、担当外の学生にサポートをしてもらえるように、誰もが駐車場を担当できるように事前に説明しておくことが必要だと理解した。

(5) 食堂・消毒

5) - 1 食堂・消毒担当 親子とのかかわりで気づいた点



《記述5-1：食堂・消毒担当 親子とのかかわりで気づいた点 (記録の一部)》

- ①親子に関わる際の服装・髪形：入口で消毒、食堂のお子様ランチの案内をするため、爪や髪を結ぶなど配慮した(6月)。
 ②挨拶の仕方：ランチの案内をしたが、嫌な顔をされてしまった。挨拶がないまま案内したからだった(6月)。
 ③声かけ・コミュニケーション：消毒は、親子に毎回やらしてもらわなければならないので、いきなり声をかけないで、子どもにわかりやすいやさしい声かけで消毒器に手を入れてもらうようにした(6月)。
 ④大勢の参加に緊張した：各月該当者なし

① 親子に関わる際の服装・髪形

5月は3人、6月は3人、7月は3人であった。服装や髪型はすべての担当学生が気にしている。6月には、消毒をする際の手や爪を整える大切さにも気づいた。

② 挨拶の仕方

5月は2人、6月は2人、7月は3人であった。毎月人数が増えている。6月には、ランチの案

内をしたが、嫌な顔をされてしまった。振り返りの場で、挨拶をしないで案内だけをしていたことに気づいた。コミュニケーションの入口としての挨拶の重要性を理解した。

③ 声かけ・コミュニケーション

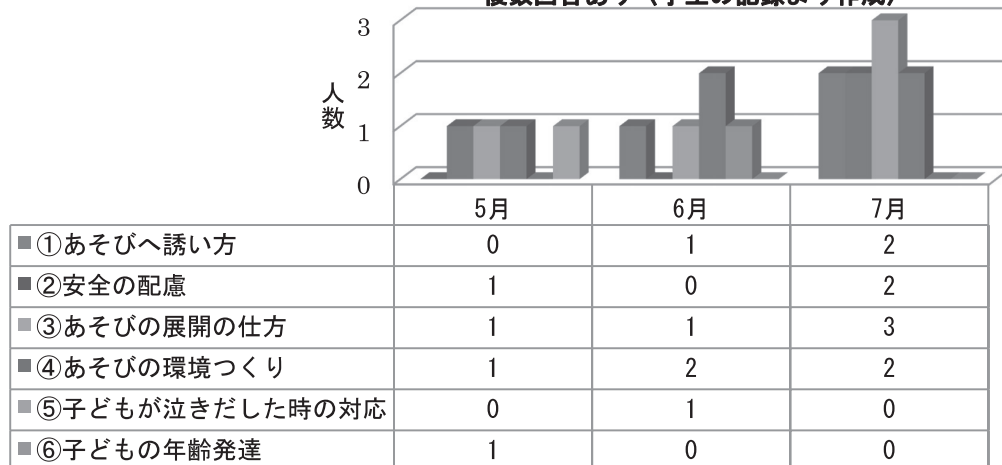
5月は1人、6月は2人、7月は3人であった。5月には親子への手の消毒の際、なんとなく手を出して消毒をしてもらっていた。衛生上、手の消毒は必須であり、「消毒やるよ」といきなり声をかけないで、「おててをきれいにしようね」と優しく声をかけて子どもに納得してもらうことの必要性に気づいた。

④ 大勢の参加に緊張した

5月は0人、6月は0人、7月は0人。大勢の参加に緊張した学生はいなかった。

5) - 2 : 食堂・消毒担当 子どもとのかかわりで気づいた点

表5-2 食堂担当等：子どもとのかかわりで気づいたこと担当（N=3）
複数回答あり〈学生の記録より作成〉



《記述5-2：食堂・消毒担当 子どもとのかかわりで気づいた点（記録の一部）》

- ①あそびへの誘い方：消毒を親子にやってもらうことだけで室内あそびに誘うことまでできなかった（5月）。
- ②安全の配慮：ベビーカーを使用している人が自動ドアを通る際、その都度ドア付近の危険に注意した（5月）。
- ③あそびの展開の仕方：靴を履かないで戸外のあそびに走ってしまう子どもや、自動ドアに挟まれそうな子ども、ラウンジからいきなり飛び出す子どももいた。あそびの流れを伝えることが大切だった（6月）。
- ④あそびの環境づくり：来場者が多く、入口の消毒器の前が混んでしまった。すんなり室内に入れるように消毒器の数を増やし、混雑回避の案内役をつくることにした（7月）。
- ⑤子どもが泣き出した時の対応：消毒を嫌がり泣く子どもがいた。保護者と話ながら子どもに手を出してもらくと、子どもが泣きやんだ（6月）。
- ⑥子どもの年齢発達：午前中に寝ているまま来場してくれる赤ちゃんの消毒はどうしようか迷った（5月）。

① あそびへの誘い方

5月は0人、6月は1人、7月は2人であった。毎月気づきの人数が増えている。5月には、消毒を親子にやってもらうことだけで室内あそびに誘うことまではできなかったが、7月には担当者全員が消毒後のあそびの誘いかけができるようになった。

② 安全の配慮

5月は1人、6月は0人、7月は2人であった。初回に、ベビーカーを使用している人が自動ドアの前で混雑してしまうため、扉の隙間に子どもが挟まりそうになった。学生は、自動扉を出入りする際、その都度付近の危険に注意することに気づいた。7月には一時に入口の自動扉付近に双子用のベビーカーが並んだため、学生たちは、安全確認に注意することを理解した。

③ あそびの展開の仕方

5月は1人、6月は1人、7月は3人であった。毎月気づく学生の人数が増えている。6月には、靴を履かないで戸外のお遊びに行ってしまう子どもや、ラウンジからいきなり戸外に飛び出す子どももいた。室内と戸外の全体のお遊びの流れを把握しておく必要があることに気づいた。

④ あそびの環境づくり

5月は1人、6月は2人、7月は2人。来場者が多く、入口の消毒器の前が混んでしまった。安全のためには、親子がスムーズに室内に入れるように消毒器の数を増やし、混雑回避の案内役をつくる必要があることがわかった。

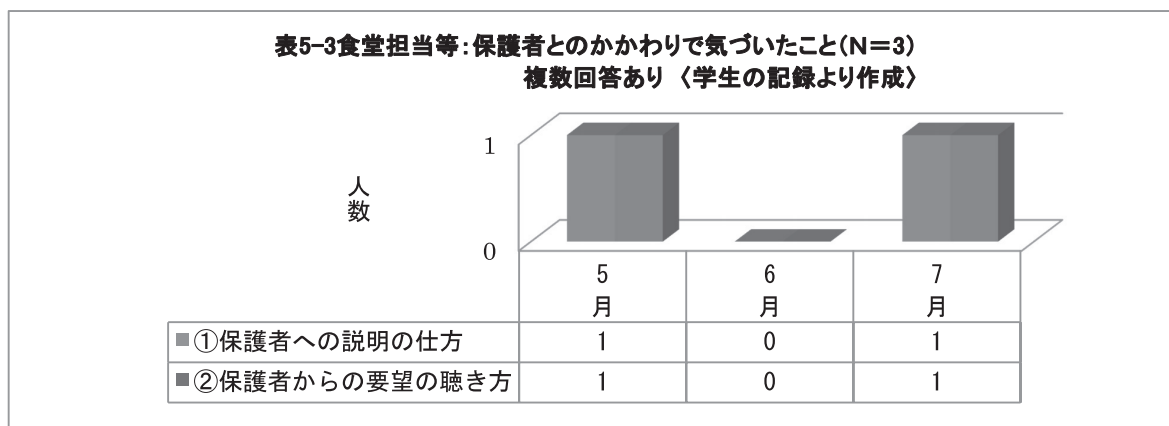
⑤ 子どもが泣き出した時の対応

5月は0人、6月は1人、7月は0人。6月になると、消毒を嫌がり泣き出す子どもがいた。親子で一緒に消毒器の前に手を出してもらおうと、子どもが安心して泣きやむことに気づいている。

⑥ 子どもの年齢発達

5月は1人、6月は0人、7月は0人。5月には、寝たまま来場する赤ちゃんの消毒の対処を迷った。午前睡をする子どももあり、子どもの年齢発達によって生活パターンの違いがあることに気づいたようだ。

5) - 3 : 食堂・消毒担当 保護者とのかわりで気づいた点



《記述 5 - 3 : 食堂・消毒担当 保護者とのかわりで気づいた点 (記録の一部)》

- ①保護者への説明の仕方：食堂案内は『あちょぼ名物ランチ』はこんな種類があると短時間にわかりやすく知らせることだった（5月）。
- ②保護者からの要望の聴き方：混雑する入口で固まる親子の室内への誘導をスムーズにするためには、入口で親子に話しかけて仲良くなっておくことが大切だった。そうすることで、安心して要望が行ってもらえる関係になる（7月）。

① 保護者への説明の仕方

5月は1人、6月は0人、7月は1人であった。月により気づく人数に変動がある。保護者への説明として、『『あちょぼ』名物ランチはこんな種類がありますよ』と端的にわかりやすく知らせることの重要性を理解している。

② 保護者からの要望の聴き方

5月は1人、6月は0人、7月は1人。7月になると、室内の入口として、親子に挨拶し、親しになれるように笑顔で話しかけることで、保護者が気軽に要望を伝えられる関係づくりができると考えた。

4. まとめ

(1) 親子とのかかわりで気づいた点

1) 親子に関わる際の服装・髪形

学生のほとんどが親子に関わる際の服装・髪形の大切さに気づいている。また、学生グループ全体で清潔感を心掛けていることが分かった。子どもに触れることを想定して爪を切っておかなければならないことも理解している。

2) 挨拶の仕方

挨拶に気づく学生数が月ごとに増加している。学生たちは、5月、6月時点でも挨拶が大切なことは理解していたが、7月になると、その具体的な重要性に気づいた。挨拶は、話に入る前段階にあり、学生が挨拶をすることで、親子との関係づくりにつながる。さらに、挨拶の前にも親子の目線にあわせるなどの非言語的なコミュニケーションをとる必要がある。子どもとのあそびでは、目を合わせることで、子どもの目線の先のものを見つけ、子どもの興味を知り、かかわりの糸口がみつけれられた。そこからあそびに発展することを理解した。

学生たちの気づきの記述の仕方から、挨拶をその他のコミュニケーションとは別に、あるいは挨拶の続きにコミュニケーションがあることと捉えていることが分かった。その捉えが親子との関係の深まりにつながるのだといえる。

3) 声かけ・コミュニケーション

製作コーナーと駐車場の担当者は、月を経るごとに親子とのコミュニケーションに慣れてきたのか、7月には、子どもがあそびを展開できるような環境や場の雰囲気づくりについて気づいた。子どもとのコミュニケーションは、学生が子どもの気持ちを受けとめて子どもを褒めることで、子どもが自分を表現できることだと理解した。

消毒は、毎回入口でかかさずやってもらわなければならない。担当者は、親子に納得して協力してもらうための声かけをする。いきなり子どもに声をかけないで、子どもが納得するためには、保護者に協力をお願いする必要があった。そのためには、笑顔で接しながら親子にわかりやすい説明をしなければならなかった。

一方、玩具担当は、5月に積み木を投げてしまう子どもがいたが、注意の仕方に迷い、適切な声かけができなかった。

7月になると、事前に子どもとの非言語的なコミュニケーションをとることの大切さに気づいた。

4) 大勢の参加に緊張した

最初の催しでは、担当者たちは、すべての業務に不慣れで緊張した。5月には、駐車場担当学生は、素早く保護者に指示しないと後続車がその場で立ち往生するという不安があり、非常に緊張した。月を経ることに大勢の親子に緊張する学生数が減っていた。学生たちが担当業務に徐々に慣れてきたことが読み取れた。保護者にも手助けを求めることに遠慮や躊躇することなく、むしろ一緒に会を作っていくことを理解できたことも緊張感から解放された理由である。

5) 汚した後始末の仕方

制作では、7月に、子どもがのりやマジック、クレヨンを使用する際に、使い方が分からないまま使っている場合があり、その都度子どもに使い方を知らせなければ、制作スペースが散乱してしまうことに気づいた。後に来た子どもたちが使いにくくなってしまうため、常に子どもがあそびやすい環境を整えておくことの大切さに気づいた。

乳児が玩具であそんでいる際、突然吐いた。母親から病気などで吐いたのではないことを聴き、安心した。看護師に相談し、ビニール手袋や雑巾、アルコール消毒などが必要なことや後始末の仕方を聴いた。落ち着いて周囲と連携した対応することの必要性に気づいた。

(2) 子どもとのかかわりで気づいた点

1) あそびへの誘い方

受付で保護者の書類記入を退屈にみている子どもに声をかけ、様々なあそびに誘うことができるようになっている。7月には、催しの流れや他の遊具・玩具などの配置などを理解できたこともあり、あそびに誘いやすくなった。

制作担当者は、7月になると制作の目的は、①親子で楽しんで作ってもらうこと、②作ったものを家に持ち帰り、家庭でも同じように子どもと作って遊んでもらうことなど、具体的な制作の目的に気づいている。担当の目的を再度意識することができるようになった。

5月には駐車場の担当業務だけに意識を集中していたが、6月には、戸外だけでなく、室内のあそびとのつながりの重要性を理解した。会全体のスケジュールを熟知していないと室内あそびへ誘いにくいことがわかった。

遊具・玩具担当者は、6月になると保護者とも関係ができたため、「うちの子はままとあそぶの」と教えてもらい、子どもの好きなままとあそびに誘うことができるようになった。

それぞれの担当の場で全体の催しの内容や担当以外の場についても理解していく必要に気づいている。

2) 安全の配慮

初回催しに、ベビーカーを使用している人が自動ドアの前で混雑してしまうため、子どもが付近

を通る際は、自動扉の隙間に挟まらないように十分に危険に注意することに気づいた。6月になると、玩具や遊具の担当者は、子どもの足元に危険や壊れた玩具、剥がれている壁面はないかと十分確認し保育環境の安全に注意してあそばせることができるようになった。

7月には、受付の担当に慣れてきたため、時間を見つけ他の担当を手伝うことができた。また、制作コーナーの全体が把握でき、はさみやのりなどを使用させる際は子どもに危険のないように注意できるようになった。

3) あそびの展開の仕方

受付でのあそびの展開の仕方について、担当外の場に積極的にサポートに行き、全体の様子を見て動くことの重要性を理解した。

制作担当は、6月になると、子どもが主体的にあそべるように、子どもに自由に選択させるなどの配慮ができるようになっていく。

駐車場の担当学生たちは、6月には会場全体が把握できていた。さらに、7月には、学生が主体的に、親子が来る前に落ち葉を掃除して足元の整備を行うなど、親子を迎え入れる準備ができるようになった。

4) あそびの環境づくり

当初は受付の書類の準備で手一杯であったが、7月になると受付全員が、他担当の学生たちに、言葉がけをして助け合うなどのチームワークを取ることが大切なのだと気づいた。6月になると、制作物のできあがり、『すべてこうしなければならない』という、型にはまったあそびを押し付けるのではなく、子どもの好きな遊び方や好きな色を使って制作する楽しさを味わわせることが大切だとわかった。

7月には、援助する環境づくり、事前の物的環境や援助者としての人的環境の整備についても考えられるようになった。

5) 子どもが泣き出した時の対応

6月には、書類に記入する母親を子どもが待つ時間に傍に、音に出る玩具や可愛い人形など、子どもの発達年齢に合い、子どもが興味を示す玩具を事前に準備しておく必要があったことに気づいた。

6) 子どもの年齢発達

制作担当者は、6月になると、子どもを自由にあそばせる上での子どもの発達にあった援助の重要性に気づいた。駐車場を歩行してくる子どもの中には、まだ歩き始めの子どもには足場の悪く危険な場所があり、安全に通るすぎないように保護者に協力を求めることができるようになった。

(3) 保護者とのかわりで見つけた点

1) 保護者への説明の仕方

初回の受付では、保護者が記入している時には子どもを抱っこして書きやすくしようと考えたが、逆に子どもだけに気を取られ、親への説明がうまくできなかった。周りの学生に支援を求めるべき

だったと振り返った。6月には前回の気づきの改善をしたが、7月にはまた、双子を連れた保護者や様々な親への説明の仕方の難しさに気づいた。

制作では、7月になると、親に制作の内容を知ってもらうために、制作物をもって呼び込み説明をした。そうしたことで親子が制作に興味を持ってくれた。制作物を保護者にみせて歩き、具体的な内容の説明をしていくことが必要であることに気づいた。

2) 保護者からの要望の聴き方

6月には制作の説明を求められたが、どう応えてよいかわからず慌ててしまった。手順を伝えるためには、担当者自身が内容を熟知しておくことが必要だと理解した。

受付で配布するアンケートは、子どもを抱えていると書きにくいため、学生が子どもを見守り、親に記入してもらうとよいことに気づいた。保護者との会話については、リラックスして学生から質問すると、母親が話をしてくれることがわかった。

消毒担当者は、7月になると、入口で親子に挨拶し、話しかけることで関係をつくっておくことが大切だということに気づいた。安心して要望を伝えてもらえる関係づくりに努めた。また、自分の担当外でもサポートができるように、すべての学生が会全体を把握しておくことの必要性を理解した。

おわりに

静岡英和学院大学では、2011年6月から2015年2月まで約5年間『学生による子育て親子広場あちょぼ』を行ってきた。亡き大島道子先生が立案した子育て支援事業であった。『あちょぼ』は地域親子の子育て支援の場であり、保育者をめざす学生たちの保育実践の場として極めて重要な取り組みでもあった。2011年当初、学生たちは、それぞれに自作の名札を用意しエプロンにつけ緊張感のある表情で参画した。どのくらい地域の親子が参加してくれるのかもわからず、手探りのまま『あちょぼ』を開始した。

学生たちは、事前に保育実技や親子とのかかわり方について学び、『あちょぼ』の準備に挑み、親子たちと会えることを楽しみにした。回数を重ねるごとに、学生たちは、保育実践には準備だけでなく片づけも大切だと気づき、保育実習や教育実習でも自ら率先して行なった。

『あちょぼ』は地域の保護者からも好評であった。母親だけでなく父親の参加もみられた。将来の保育者になるお兄さんやお姉さんに、少し育児の先輩の保護者たちが優しく声を掛けてくれた。大学の校内で清潔感があり広々としていることも大勢が参加してくれる理由であったと聞く。お母さんから、「子どもが『お気に入りのお兄さん、お姉さん』に会いたいから参加する」という言葉も聞いた。『あちょぼ』は学生と親子がおりなす大イベントであった。相互作用で成り立った子育て支援事業であった。

本稿までの3年間で学生の成果を学生の記録から報告できた。毎年「乳児保育Ⅰ」を受講する学生は異なるはずであるが、先輩学生たちが後輩学生に様々な子育て支援の内容を伝授してくれてい

ることから、次々に学生の気づきの質が向上してきたことが認められた。

このような非常に有意義な生きた保育実践の取り組みの成果を発表できたことについて、『あちょぼ』の実践研究に協力してくれた地域の親子のみなさんにお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 内閣府文部科学省告示第一号厚生労働省、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、平成20年4月30日、
<http://www.youho.go.jp/data2014/H26NMKkokujil.pdf>
- 2) 保育士養成課程等検討会：保育士養成課程等の海底について（中間まとめ）、2010年（平成22年）3月24日、2010
- 3) 矢田貝真一・永田恵実子：実践的指導力育成をめざす「保育実務研修」についての考察(1)－3年制保育者養成課程における科目としての成果と課題－、大垣女子短期大学紀要第51号pp49-60、2010
- 4) 永田恵実子・矢田貝真一・茂木七香：「保育実務研修」における成果①日本保育学会第63回大会、2010
- 5) 茂木七香・永田恵実子・矢田貝真一：「保育実務研修」における成果②－学生の自己評価から－日本保育学会第63回大会、2010
- 6) 乳児保育研究会編：『改訂新版資料でわかる乳児保育新時代』ひとなる書房、2010
- 7) 大橋君子編：『新時代の保育双書－乳児保育－』（株）みらい、2009
- 8) 松本園子編：『新・乳児保育の生活と保育』ななみ書房、2006
- 9) 吉本和子：『乳児保育－一人ひとりが大切に育てられるために－』エーデル研究所、2002
- 10) 全国保育士養成協議会専門委員会：保育士養成システムのパラダイム転換Ⅰ～Ⅲ、保育士養成資料集、第44・46・48号、2006；2007；2008
- 11) 清水一巳：保育者の実践力に関する研究－遊びと交流活動との関係から－、名古屋女子大学紀要、55（人・社）、2009、pp89 - 102
- 12) 文部科学省：子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について－子どもの最善の利益のために幼児教育を考える－（中央教育審議会答申）、2005
- 13) 阿部和子・大場幸夫編：『新・保育講座⑩乳児保育』ミネルヴァ書房、2002
- 14) 河原佐公編：『保育者と母親のための共に育てる共育書0.1.2歳児マニュアル』ひかりのくに、1997
- 15) 岡本美智子編：『最新保育テキストブック5〈保育実習〉』聖公会出版、2007
- 16) 岡本富郎他：『〈新訂第2版〉幼稚園・保育所実習の指導案はこうして立てよう』萌文書林、2009
- 17) 谷川裕捻編『保育者のための文章作成ワークブック』明治図書出版、2006
- 18) 徳田克己編『気になる子どもの保育ガイドブック－はじめて発達障害のある子どもを担当する保育者のために－』福村出版、2010
- 19) 民秋言：『保育士のための自己評価チェックリスト』萌文書林、2008
- 20) 石橋裕子・林幸範編：『知りたいときにすぐわかる幼稚園・保育所・児童福祉施設実習ガイド』同文書院、2011
- 21) 榎木一二三子編：『シードブック保育者論』建帛社、2009
- 22) 滋賀県米原市社会福祉法人大原福祉会大原保育園：<http://www.ans.co.jp/n/ohara/>
- 23) 東京都台東区社会福祉法人康保会：<http://www.kouhokai.or.jp/>
- 24) 社会福祉法人四国大学福祉会四国大学附属乳児保育所：<http://www.pikara.ne.jp/nishitomida>

（本論文は、平成26年度「乳児保育Ⅰ」の受講学生35名の協力を得てまとめ報告したものである。）